特54
19

074887−000−3

特54−19

春木座筋書

小野塚　利右衛門／刊

M16
CEK−0318

○東風吹ば匂ひと運ぶ飛梅の盛り久しき筑紫の御愛樹

神靈菅原道實記 御繪傳六卷

○啼ばまそ名殘ゝ盡ぬ木像の榮へ久しき河内の木槵樹

〔序幕〕

加茂の道綱時平公より諫言の場　清貫傳五郎　希世國君　道綱源之助
奸臣河邊武彦道綱を暗殺の場　光銀光　包忠才五郎　定國嶋藏　貞文百藏　岩淵イし　武彦銀之助　中川猿三郎　村雨紫喜三郎

此狂言の時代ゝ當年を凡九百八十余年程以前(延喜年間)にて恐を多くも萬上の帝を醍醐天皇と尊ミ奉る頃(則ち皇代)の狂言とゝてれなり扨その頃の左大臣が藤原の時平公にて右大臣ゝ菅原の道眞則ち菅公なり

時平ゝ菅公が忠敏ミよつて時の天子様の御寵愛を厚く蒙りやゝもすれば己が位を越て關白にも昇り玉ふありさまを深く嫉み神職加茂の道綱ふ言付け菅公を密ミ調伏させんと謀れども道綱これを聞かゞ却て時平を諫る是ミて時平ゝ

密事の露顯せん事を恐れひそかミ川邊武彦と云惡者をして道綱を鳴川の堤に待伏せ切殺さす段ミて幕

時平公の暴行菅公を呪詛の場

時平公　我童　國經の北の方綾子　田之助　腰元紫喜三郎　巴滿治
島田太郎　小團次　鞦負の安近　源之助　仕丁大せい
島田次郎　壽美之丞　藏人友房　傳五郎　小性二人
申上升一　八

嵯峨の奥ミ時平公閑靜を樂むとは詐ミて寇ゝ菅公を退け天下の政事を獨斷せんと企て惡僧ミ菅公斷絶の呪詛をさすれ共菅公ゝ天地神明の加護にて邪法調伏の驗なく夫ゆへ又手術を變へ「右大臣道實ゝ己が娘の婚則ち皇弟の齊世親王を御位ミ即け奉らん企ある」なゞト(時平の妹)が入内ミて居るを幸ひに源の光廉原の定國菅根希世なゞ云諸卿とも謀らせ　延喜の帝へ讒奏さすより菅公ゝ遂ミ大宰權帥と云官ミ貶られ寃を蒙り玉ひ筑紫へ流罪と極る是を宇多法皇が聞し召し驚き玉ひ安近藏人の兩使を國經の館へ差向け菅公の左遷を救せんとする件ゞ

國經の後妻綾子の前。夢よ時平が戀慕の使よまみへる奇偶の正夢を見せ(綾子)國峰が諫言を聞きして綾子を時平が許へ使ひをする段にて(道具)時平の閑居と變る爰へ太郎。次郎の兄弟兩花道より出で、菅公の流罪救免の義を、時平よ願よ來る是を兒侍の時文がさゝへる事より暗闘模樣の立廻りよ成りド、正面の御簾を引落せば時平綾子しどけなき姿よて居る是より獨吟を遷ひ(我小春田源)五人のだんまり都て色氣が有てそゞみの仕組よろしく幕

○菅公道明寺よ木像を遺し玉ふ場　奥源之助　藍の前　花友
○姫君覺壽菅公よ別を惜み玉ふ場　伴善友　國若　白菊姫　伊三郎　刈屋姫　千鳥　菅三丸　小時

〔三幕目〕　覺壽　我童　花子前　田之助　同宿の尼　四人　春彦　傳五郎　田繰前　巴瀧治　仕丁　大勢

平舞臺尼寺の体琴唄よて幕明ト腰衣の尼四人が菅公筑紫へ御出船に付風待の間に覺壽樣へ御暇乞の御滯留中と饗應の拵をする所へ刈屋姫を始め切髪振袖の尼。花子。田繰。薫。白菊。此四女は曾刈屋姫の兄嫁達なり出よなり父上樣よは伯母君の頼よ依て木像を記念に遺さんとて別間よお籠なさるゆへ今よおめもじも出來ぬト悲み齊世親王が出家せられし筋を演べあじきなき身の成行と皆々嘆息の折から藤原の其與半素衆よて來り(覺壽)よ對面して今雨三日も御逗留させましたけれど風波よ依り明曉六ツの御出船それに付相巫樣へ御拜顔を願度と願む人あり志を感して伴ふたり春彦是への聲の下伊勢の神主波會春彦白髮あたま白の狩衣よて子役の菅三丸を連れ出よなり菅三丸が三ッの年比敏山よ登りし儘父菅公よ逢見ざる事と春彦よ白大夫と云名を賜りし物語に(覺)父を慕ふは尤もの事慣然よと撫擦り幸ひ此嫁娘にも逢玉ふよふ願ふて見んと奥へ皆々引連は入る跡よて春彦配所への供を願ふ其與その心根を哀み許そ事あつて頻よ菅公の寃を嘆息する臺詞波ッて道具廻る(同與庭先雪降りの道具)注連縄を張りし檜の一室に菅公(右團治)木像を刻ミ居玉ふ處(覺)は以前の女形を呼んで明曉の出帆ゆへ逢て遣て下されと願ども木像よ魂入らねば詮なしとて一念込ての御彫刻セメテ御姿なりと拝んで置キヤと云是よて荊屋姫を始め女形皆々尼よなりしは皆讒者

のさかしらゆへ也ト夫が流罪よせられし事を告る菅公これを聞き驚玉ひ。我一人と思の外齊世親王を始め我子四人の者までも流罪に行るれ〻ハ餘無慈悲と讒者を憎み悔ミ玉ふ爰へ春彦管三丸を伴ひ來る菅公ハ是を聞て此期に望み逢ぜよ胸を焦のは子よりも父が百倍なれど子でおいとして逢ぬのハ此道實が子にしさ成人の後を必ふぜ一天の君よ忠節を盡せよと逢ぜよ戻そふトする。覺壽始め皆々是を執なし是非逢て遣てト頼む件より。父を知らば子の爲あらぜト菅公燈火を消て對面そるところ(女形)父上のお姿ハト問ふ(子役)木像を指示て後よといふ(木像光明を放ち生るか如くなれば)菅公よも不思議よ思ひ心を籠し甲斐こそあれ父を戀と思わば木像を父と思へ我魂ハ之よ留置也と是よて皆々奇特を感入る處よて(又道具二重の大家蛍よ替る)爰へ早時刻なりと具奥善友の兩使來りせめて別れの御盃と名殘を惜しむ蛍詞渡ッて泣落ト雞笛よ成○菅公(啼ばこそ名殘は盡じ鶏が音の聞へぬ里の曉もがあ)ト口吟み玉ふ是よて段切よなり虚より雪を降らし菅公春彦と俱に花道へかゝる覺壽始め皆々見送る段ハ幕外の這入よて此

狂言中眼目の性念塲恩愛の慈嘆よ看客の袖を濕さす處なり

〔三幕目〕北の村の農民へ蛍像を與へ玉ふ塲　渡會春彦　傳五郎　少尉善友　國若　東成郡よ安居の天滿宮御由來の塲　同　島田太郎　小國治　百姓鎌六　百藏　菅原道具　右國治　藤原具奥　源之助　同　豐作　銀　孝

舞蛍具中よ莫大の岩山。下手よ大船の先を出し後背一面浪の遠見爰よ百姓大勢居並び生た神樣云々と菅公の德を慕ひ團子を献上よ來る(具)之を取次で晴渡りたる四方の景色御眺望有て然る可し〻ト云是よて(菅)張輿の内より出で百姓の心盡しを悦び望の通り蛍像を認めて與へ玉ふ件よりパタ〳〵よなり花道ゟ菅公の家來島田太郎走り來て君の成行を歎き「拙者事は昨年の夏。貧民へ御仁惠の大金を預り御領分の丹波へ行道生野の里よて師匠の娘蠶絹と申者よ出逢しゟ恩義の爲よ彼の大金を遣ひ果せし身の落度と殘悔なしせめて配所へ御供致し憂よかしつき御厚恩を報し奉らんと願ふ(菅)あやまちを改て磨よ忠節を盡すゟ跡に殘てまだ外よ忠義を盡す事あそ有め昨日は錦の床よ座し今日は石上よ身を座

そも盛衰の理と悟れば更に感もなし道具が心安しと思へ。○今より此所を安居の岸と稱そべしと是を後世安居の天神と崇め祭と云淨瑠璃有て憑地惡の善友時刻が移ると船の内へ菅公を守護し皆々這入跡又バ〳〵よて島田次郎北の方分の文を持花道分出て菅公に對面を願ふ善友之を許さす(兄)の太郎は(弟)の次郎を見る分身の誤を詫すれど(弟)女よ心を亂され主家の大事よ居合さぬ不忠者詞のはすも穢はーいト斯な事の言上り分兄弟目覺しき喧嘩の立廻りと成。此時船の舳へ菅公出玉ひ。兄弟の爭論を制し種々說諭あつて只今次郎の來しは妻が使と篤より知れと退立の官人等が出船を急で許ねばいふ事さへも是限り名殘は盡と兄弟さらばト行ふとする(次郎)い只一言申上度事が有ゆへ暫く御待下されと舳綱よ取附是より淨瑠璃よて船次第に下手へ行を兄弟出そまひト引張る善友出て舳綱を切る是よて船次第に下手へは入る。兄弟名殘を惜み船を招く此内舞臺廻り岩臺の後が正面トなる其内よ遠見の船棧敷の膝隱の上をズット向へ行く。兄弟岩の端へ駈登り船の見ぬ樣に成と本意なく思ひ顔見合て二郎岩の上分兄の太郎と蹴落をを水の頭に幕

〔四幕目〕兄の作次鄉里よ筆法の秘傳を授る場　同弟次郎　壽美之烝　下男五助百　瀧
弟の兩人船井に出逢ひ遺訓を受る場　女房つゆ次　三津三　女房梅の井　千　鳥　同　三助銀　孝
大兄島田作次　右團治　中兄太郎　小團治

爰は丹波船井郡室川村庄屋作次の住居。世話場の道具爰に村の子供大勢手習をして居る處仕出の作男等が例の噂に此里ゑ元菅公樣の御領分にて旦那ゑ村長とゑて居るよ依て菅家の筆法を末の世迄も傳へる爲○此度ゑぬさも取あへず手向山ジャノ又詩とやらを敬なさる抔話既そる花道より嶋田太郎。露絹。旅姿にて來り兄の作次に對面して「菅相丞樣の配所へ御供の願ひ叶はす北の方は御預げの御身。若君樣は御行衛知れを據なく兄上の御機嫌伺んと立歸り又生野の里よて師匠の娘露絹に廻り逢ひし故連立來し由を語る作次聞て露絹事は兩親の病苦を助る藥の代よ身を賣たれど元來言号の事なれば太郎の嫁よせうといふ兩人是を悅ぶ處へ又。花道より島田次郎と妻の梅の井が旅姿よて是も兄に對面

せんと來て太郎よ出逢ど不和の中なれば物も言ぜよ居る大兄の作次是を聞て怒り次郎を責て北の方や若君の御供を仕て來もせぬ女を連れ態々來る不忠不義の次郎忠之此大兄が義絶そるトッヽト出てウセイと言つヽ太郎と露絹を連て奥へ這入る跡よ次郎茫然として嘆きの語詞渡て道具廻るト(同奥坐敷の体)太郎と露絹が打しはれ居て(太)女故に忠義の道を踏迷ひ生て居れぬ此身の義理ト己よ死なんとするを露絹も供よと覺悟を極め手を取かわす折柄作次が千秋万歳千箱の玉を奉ると三方と持出來り兩人の中え置(太)盃と思ひの外短刀なれば悔りする(作)何驚く事が有る汝主家の大事よも有合さぬ若君の御行衛も尋ねぬ女と引連御領分の民を悩ん流行の金さへ遣ひ失ひ兄の顔まで泥をぬる人非人め恥を知るならサア自殺せよと今迄ッザと次郎よあたりし事を云(太)面目もなき此身の不仕だら素より覺悟ハ此通りと上着を脱げば白裝束(作)流石は弟其姿ハけなげなるが汝如き不所存者ハ腹切すべも知り居るまじ兄の情よ敬て遣ると短刀取て我腹へ突立る兩人悔り左右より取つき介抱そる(次郎)(梅の井)も驚き双方より「ヨヤ何故の御生害と問ふ(作)我死ぬるハ弟夫婦が身の誤りを曽公へ御詫の爲也此後ハ兄弟睦しく太郎ハ配所へ至り給仕せよ次郎と若君の御行衛を尋ね守護致せ二人の妻ハ跡よ止まり此家を守り相丞樣を神と崇め奉れと夫くに遺言そる是にて布袋天神の面來を聞しトヽ太郎トつゆ絹よ祝言さを事あッて(作次)苦しを乍ら四海波靜かよト諾ふて落入を木の頭に幕

〔五幕目〕

筑紫太宰府配所の場　曽公　右團次　庄屋茂作　百蔵　船頭梶六　麥蔵
島田太郎　小團次　同松兵衛　島蔵　同浪蔵　才五郎
同大詰　春彦の白太夫　傳五郎　河邊武彦　銀之助　同磯八　銀平
天拜山よ所の場　山杣三作　團若　同滝五郎　新太郎

島田太郎ハ曽公の配所を尋ねんとして船頭と大喧嘩よなりトヽ河邊武彦を追駈追入濁黄幕切て落すと山又山の遠見裏中に鄙賀屋根一間半の庵わり破れ御簾をかけ都て曽公配所の道具爰よ曽公病氣の体白太夫悄々として守護して居る杣人等梅松櫻は御愛樹なりとて持來り慰むると(白)悦ひ曽公の御歌よ「東風吹

かば匂ひおこせよ梅の花主あしとて春なわすれそと成されしかば此梅の木一夜よ生じたり非情の草木さへ歌の德を慕ひ來しゆへ飛梅とい號たりと由來を聞す(菅公)も感じ玉ひ剛毅木訥仁ふ近しと世よ稱られし道眞を痛ゐる、志奇特あ者と賞譽の詞よ皆々歡入る跡よ(菅公)都の空をあつかしく思ひ出て帝の龍顏をも拜したしと八眼なければ落涙を催さる、折柄島田太郎が走り來白太夫と顏見合し配所の姿を嘆息して我君。樣。おなつかしう五至り舛と是より硯筥よ成り「兄の遺訓に依り讒者を探せしに日頃御中睦まじかりし時平公の仕業よて夫よ加擔の定國。希世等奸智を巡らし朝廷の政事を恣よ取行ひ忠臣を退ケ加之伯父國經の妻を奪ふ抔言語よ絶たる惡逆無道ト一々委敷述けをば(菅)之を聞て悔み玉ひ。犯せる罪あく〳〵て此儘朽果る麿が身い厭ねと政事を亂す惡人を退けそんば天下萬民の爲あらさ。嗚呼、時平朝廷よ在からい、恩免の御沙汰も有らんかと思ひし甲斐も情あや時平が爲よ讒せられしか。今道眞が一命を犧牲とし天よ願り亂臣を誅せすして置可きかと告文を書こと有て彼の武彦が活首を曳拔た

玉ふにて幕

〔天拜山の体〕正面黑雲の遠見本物の若松をカブリの岩板よ植附け花道溪間の拵へ鬱蓊眞中に嶮岨なる山又巖此上に菅公紺色の裝束よて告文を竹の先よ挿み捧けて天帝へ願りの見得あつてトゞ告文を開き「臣謹て申さ云々」と讀上る間自然と雨雲のそる仕掛は看客が不思議よ思ふ漸發明なり夫より告文を宇宙へ卷上る所へ白太夫。太郎來り花道の拔け穴を潛り巖よ駈登り相丞の遺骸に取付き嘆き悲しむ既時空にて大雷の音そる菅公宙より兩人に聲をかけ又遺骸よ移る此仕組よろしく感心の幕切也

明治十六年四月七日御屆

同年　四月八日出版

〔定價金六錢〕

編輯兼出版人　本郷區元町一丁目七十五番地　小野塚利右工門

賣捌人　同區同町三十六番地　齋藤長八